

書家垂涎の古拓発見

—松本文三郎旧蔵・龍門二十品拓本—

概要

人文科学研究所・附属東アジア人文情報学研究センターでは、設立以来 80 年以上にわたって中国歴代の碑刻拓本を収集し、その整理と研究を進めてまいりました。その質と量は世界屈指のものであり、2004 年には主要な拓本のデータベースを公開しました。現在では約 5000 点を収めるデータベースのアクセス数は年平均 1,450 万件を越えております。1 日あたり 2 万件を越える、人文系の中では傑出したアクセス数を誇り、世界的に注目されているところです。

このたび未整理の拓本の中から「龍門二十品」と呼ばれる古い拓本を発見しました。当研究所には十数セットの「龍門二十品」が所蔵されていますが、今回発見された拓本は、その中で最も古いものです。研究資料としての重要性にかんがみ、原寸大に印刷して稲本泰生・安岡素子編『松本文三郎旧蔵 龍門二十品拓本』東アジア人文情報学研究センター東方学資料叢刊第 24 冊として出版しました。拓本文字データベースにおいても公開し、書家や仏教史の専門家に供するだけでなく、広く一般の方々にも漢字の美しさや楽しさを味わっていただきたいと考えています。

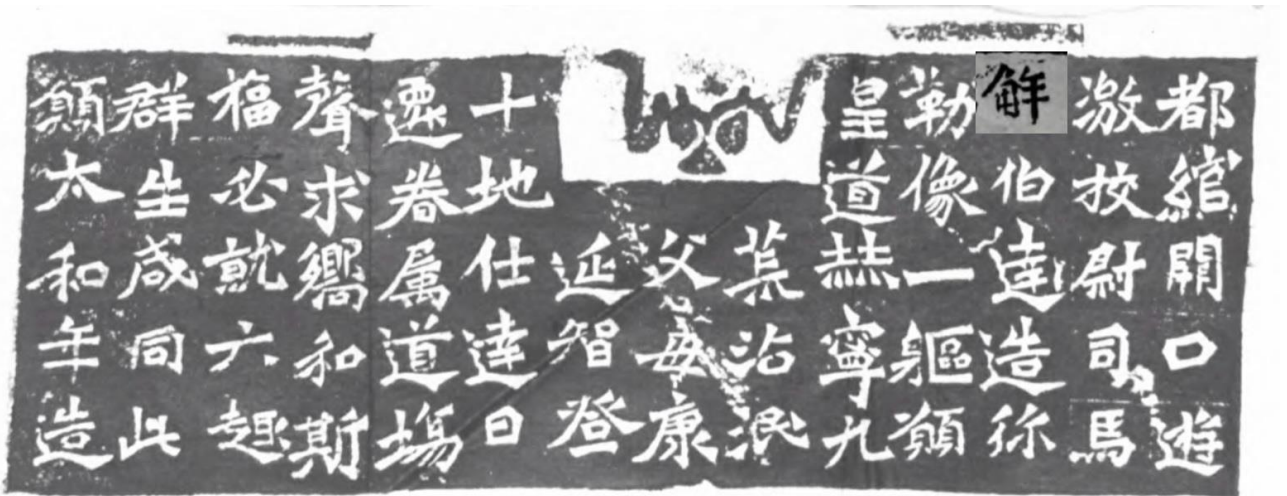


図 1 「龍門二十品」の拓本。

大意：願わくは皇帝の威光がますます輝き、その威徳が国外をも潤しますように。父母が元気で長生きし、さとの世界に到達し、(自分の)官位も昇進しますように。すべての者が、仏を仰ぎみることができ、この願いが成就しますように。六道の生きとし生けるものが、この願いを同じくしますように。太和(477～499)の年、造る。

1. 背景

「龍門二十品」とは、敦煌・雲岡とならぶ中国三大石窟のひとつとして名高い洛陽の龍門石窟において、北魏の太和十九年（495）から神龜三年（520）に彫られた文字 20 種で（現行の「龍門二十品」、松本旧蔵拓本は内訳が一部異なる）、南北朝（六朝）時代の「六朝楷書」を代表する書蹟として知られています。清朝の 18 世紀以来、その文字が書家の間で珍重され、繰り返し拓本が採られたため、原石はひどく傷んでしまいましたが、今回発見された拓本は、当研究所の前身である東方文化研究所の所長であった松本文三郎博士¹が収集されたもので、破損前の状態をとどめた最古級の拓本であることが判明しました。



図 2 破損している現在の銘文

2. 成果

センターでは 2004 年より所蔵する拓本の画像データベースを作成・公開しています。全ての拓本の文字検索や検索した文字の画像一覧を表示する集字機能があり、公開件数も断続的に増加しています。

今回発見された「龍門二十品」は書道の手本として書家垂涎の的であり、仏教芸術を考える上でも重要な文字資料となっています。破損の少ない最古級の拓本が発見されたことにより、これをもとにした研究の進展が期待されます。

3. 今後の予定

今回の『松本文三郎旧蔵 龍門二十品拓本』は 300 部限定の公費出版です。加えて拓本文字データベースとしてネット上に広く公開します。しかし、紙媒体での出版に対する要望が大きいようであれば、商業出版についても検討したいと考えています。今回新しく発見されたことからわかる通り、当研究所には未整理の拓本がまだ数多く眠っており、稲本泰生を班長とする「龍門北朝窟の造像と造像記」共同研究班において龍門石窟造像記拓本の整理と研究を進めていきます。

¹ 明治期から昭和戦前期にかけて活躍したインド学・仏教学者で、京都帝国大学文科大学の創設メンバーの一人。昭和 13 年(1938)から逝去まで東方文化研究所の所長。松本所長時代、東方文化研究所は水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』の出版(1941)、雲岡石窟の調査(1938~1944)を実施し、後者はのちに水野・長広『雲岡石窟』全 16 巻 32 冊(京都大学人文科学研究所、1951~1956)に結実した。なお松本自身もこれを遡る大正 6 年(1917)10 月 2 日、二ヶ月半に及んだ中国出張の途中龍門の現地を訪問しており、本年(2017 年)は 100 周年にあたる。

4. 研究プロジェクトについて

京都大学人文科学研究所・附属東アジア人文情報学研究センターの研究プロジェクトであり、拓本文字データベースに関しては安岡孝一・人文科学研究所教授、龍門石窟の研究は稲本泰生・人文科学研究所准教授、拓本整理は安岡素子・人文科学研究所研究員が担当しました。